

女子短期大学生の心理特性 (Ⅱ)

— ドロップアウトした学生にみられる性格特性 —

岡 田 督
番 匠 明 美
益 田 三三子

1. はじめに

昨年、毎年スクリーニングに実施している YG 性格検査、CMI 健康調査表、UPI および他の資料をもとに、本学学生の全般的な性格特性について考察した⁵⁾。その結果、情緒的にも安定しており、神経症的傾向をもった学生が少ないことと、その中で一応精神的には悩みをもっているのではと面接群とスクリーニングした学生においては、人の視線を気にするばかりに積極的な人への関わりは自分の気持ちが傷つけられそうで恐ろしく、従って積極的になれないままに悩み、迷うといった学生像が得られた。その中であって、入学後まもなく、あるいは入学前にすでに進路で悩みはじめ、結局1年以内にドロップアウトする学生が毎年15名前後いる。この数は入学者総数1100名前後からすると1%強でありさほど多くはない。しかし折角入学したにもかかわらず途中で挫折するということは、それが例え好ましい方向転換であるとしても、悩みや挫折感など複雑な経過をたどるであろうし、また、望まざるドロップアウトであればなおのこと、彼女らの以後の人生において悔いの残ることになるであろう。学生相談室としてもそういった学生の存在をより早期に把握し何等かの援助を試みたいと考える。

そのためドロップアウトの可能性をもつ学生の早期の把握のため、毎年入学前に実施している YG 性格検査・CMI 健康調査表・UPI の諸検査の結果から、ドロップアウトした学生の性格傾向を明かにするとともに、援助の時期や方法について言及したい。さらにスクリーニングの方法との関係についても考察を深めたい。

大学生のドロップアウトについては、留年やスチューデント・アパシーの問題との関連で語られることが多い²⁾。留年が表面化したのは、大学への進学率が高まり大学大衆化が進みはじめ、大学紛争前後の1960年代後半といわれ、1960年には10%にもみたなかったが、1966年には25%を越えるところもあらわれた⁴⁾。岨中⁶⁾によると1965年度～1967年度の留年率は、国立大学が10.57%、私立大学が5.08%、短期大学が2.54%となっている。また学生数の多い大学ほど留年率も高くなっていると彼は指摘している。これによると短期大学の1000人以上の規模では

2.82%となっている。そして、留年の理由としては、岨中⁷⁾は「入学後の気のゆるみ」「クラブ活動への埋没」を大きな要因としてあげており、他には「ノイローゼ」「アルバイトの過重」「学科へのつまずき」「病気」「進路への疑問」などとしている。特にクラブ活動中心型留年と意欲減退型留年が全体の半数を占めているという。今回対象となったドロップアウト群においては、筆者らが相談室で直接面接した学生の反応も、各学生のアドバイザーからの情報においても、進路への疑問やアルバイトは過重ではないにしても、そこでの生活が中心になり学業がおろそかになるケースも多いように思われる。

また、留年学生の性格として、岨中⁷⁾は「孤立的で、おおまか楽天的でありながら服従的ではない」とし、細木³⁾は児童期における不登校との連続性を認め、結局エリクソンの自我同一性の拡散であるとしている。また、中退者の特性として石井²⁾によると Summerskill, J.は未成熟、反抗性、不安、社会的独立性欠如、情緒障害等をもち、しかも自分がそのことを意識していないとのことである。こういった性格特徴は思春期から成人期へ移行する際、成し遂げねばならないそれ以前の愛情依存的対象からの精神的独立とそれに変わる新しい対象および価値観の確立、また、Blos, P.¹⁾のいう愛情対象喪失による内的空虚感 (inner emptiness) を乗り越えないままに、児童期や幼児期心性をもち続けている状態といえる。しかもそういった自己の状態への現実検討能力が不十分のようでもある。

2. 方 法

1991年度入学した学生の内、1992年3月末までに退学となった1回生の学生19名の内、進路変更等でドロップアウトした（病気とか経済的理由その他やむを得ない理由以外のなんとなく登校しづらくなったと思われる）学生15名と、1992年度入学の全学生の YG 性格検査、CMI 健康調査表、UPI の結果を比較考察する。

3. 結果と考察

(1) YG 性格検査

表1は両群の性格類型を比較したものであるが、ドロップアウトした15名の学生の類型は、A類が1名(6.7%)、B類が8名(53.3%)、D類が6名(40.0%)と情緒不安定

表1. YG 検査の性格類型別

	全学生 (92年度)	ドロップアウト群
A 類	228 (19.1%)	1 (6.7%)
B 類	150 (12.6%)	8 (53.3%)
C 類	154 (12.9%)	0
D 類	610 (51.2%)	6 (40.0%)
E 類	50 (4.2%)	0
計	1192 (100.0%)	15 (100.0%)

$$\chi^2 = 22.9331 \quad p < 0.01$$

積極型が半数以上を占めていた。これを今年度(92年度)入学の全学生の YG と比較すると、全学生の性格類型は D 類が 610 名(51.2%)で最も多く、B 類は 150 名で 12.6%であり、統計的には 1%水準で有意($\chi^2=22.9331$)にドロップアウト群に B 類が多いといえる。従って本来学生に多い D 類と B 類という二つの性格特徴に分かれているといえる。E 類や C 類といった行動面では慎重あるいは内向的、消極的といわれる類型は 1 人もいなかったのは偶然かあるいは、ドロップアウトをするためには積極面が働いているのかもしれない。従って E 類、C 類はドロップインして問題が内向している可能性もある。

次に YG 性格検査の下位項目である 12 尺度の特性について見ると(図 1)、ともに右下がりであるが全学生が AD 型、ドロップアウト群は B 型を示している。I (劣等感の強いこと)、G (一般的活動性)、T (思考的外向) の 3 尺度においては両群ほとんど差がみられないが、その他の尺度はドロップアウト群がすべて高くなっている。しかし、統計的に有意であったのは、C (帰郷性傾向)、N (神経質)、Co (協調的でないこと)、Ag (愛想の悪いことおよび攻撃的)、R (のんきさ) の 5 尺度であった。ドロップアウト群は全学生に比べれば、気分のむらややみられ、人への不信感や不満も感じられ、人と協調することが少し苦手のようなのである。反面、それが、自分に対する自信や自尊心の強さによっても考えられる。R (のんきさ) は気軽に行動できる特性であり、T (思考的外向) の高さとの関係からあまりじっくり考えないで行動している傾向が窺える。

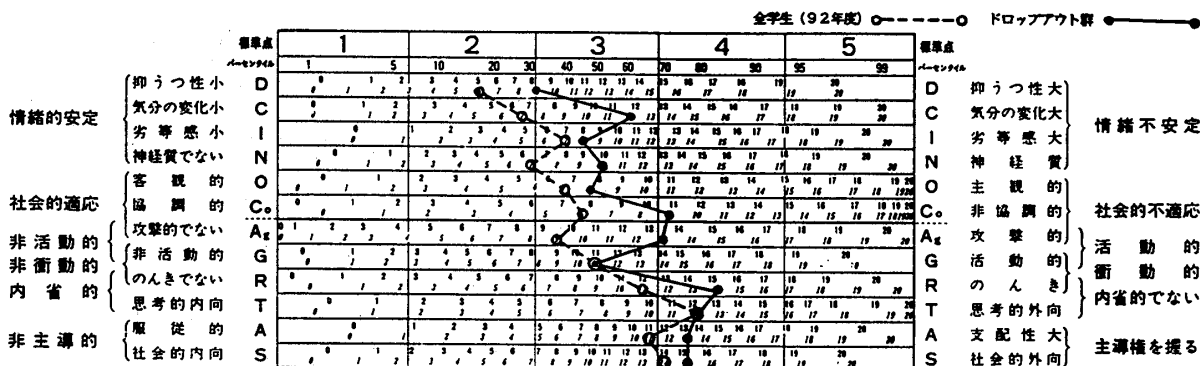


図 1. YG 因子の比較(全類)

しかし、ドロップアウト群は B 類と D 類に二分されていたため互いの性格特徴が相殺された可能性もあり、さらにドロップアウト群を B 類型と D 類型別にみた。B 類では全尺度とも有意差がみられず B 類に属する学生は両群では各尺度の違いはなかった(図 2)。つまり共に、準型 B 型のプロフィールを描いており、やや情緒的に不安定で、気軽に振舞いたいが、行動に抑制がかかり欲求不満を起こしやすいことは共通している。そこでさらに、両群の相違をみるために B 類の中から典型 B 型と準型 B 型のみを取り出しまとめたのが、図 3 である。より典型 B 類に近づくように全体が右にづれて、ドロップアウト群が典型 B 型、全学生群が準型 B 型のプロフィールを描き、その中で有意差がみられたのは I (劣等感が強いこと) のみであった。そこ

で各学生個人の尺度間のプロットに注目してドロップアウト群がより性格傾向の強い尺度および筆者らがドロップアウト群の学生に対して抱いている「何か心配なことや不安をもっているが、客観的に確かめようとせず自ら推測判断して処理してしまう」といったイメージも念めて、Ag、O、C、Aのそれぞれの尺度の中で標準点のどの区域にプロットしているかについて考察をすすめたい。

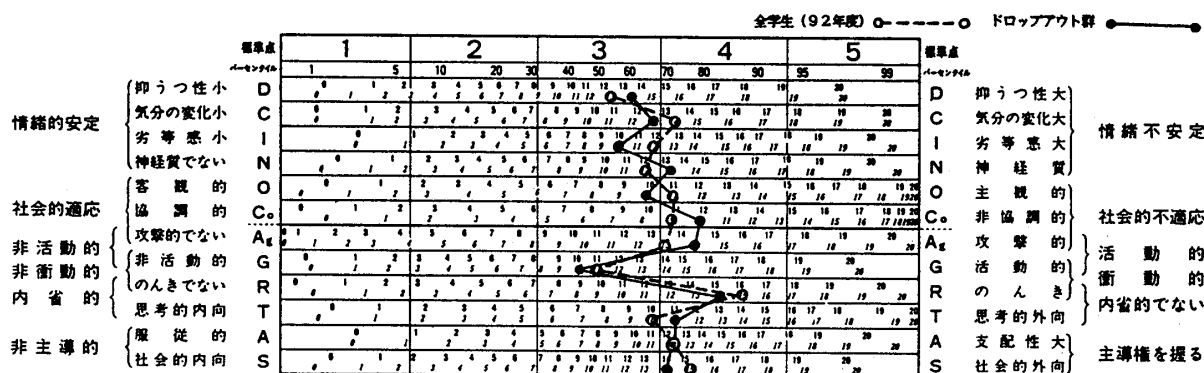


図2. YG因子の比較 (B類)

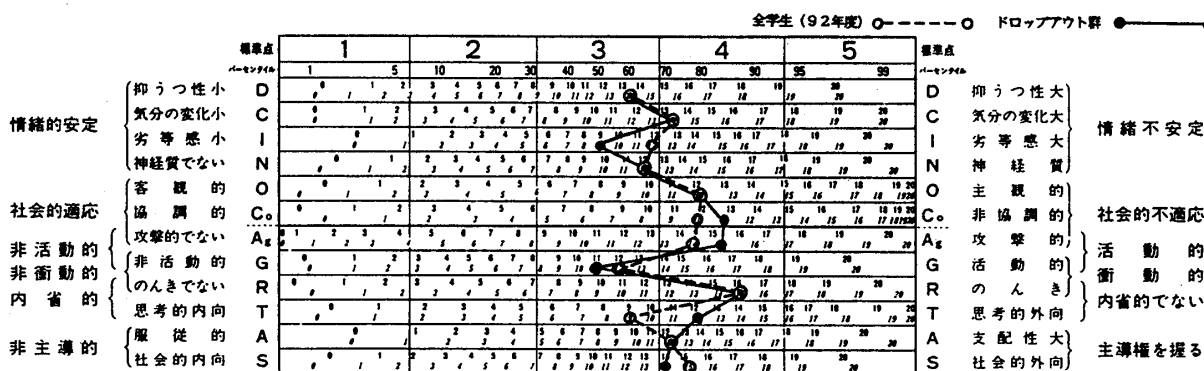


図3. YG因子の比較 (典型B型・準型B型)

表2. YGの各尺度間の関係の比較 (典型B型・準型B型)

尺度間の関係		全学生 (92年度)	ドロップアウト群	有意水準
		N = 102	N = 5	
①	Agが4～5区域	65 (63.7%)	4 (80.0%)	
②	①+Oが4～5区域	45 (44.1%)	4 (80.0%)	
③	②+Cが4～5区域	33 (32.4%)	4 (80.0%)	
④	③+Iが1～3区域	17 (16.7%)	4 (80.0%)	$P < .01$
⑤	④+Aが4～5区域	13 (12.7%)	4 (80.0%)	$P < .01$

表2はまず全学生の中で、典型B型と準型B型の学生102名とドロップアウト群の典型B型と準型B型の学生5名を対象に、Ag(攻撃的)が標準点の4～5区域にはいつている学生を選び出したのが①で、全学生65名(63.7%)、ドロップアウト群4名(80.0%)となる。そして次に①の中でO(主観的)が4～5区域にプロットしている学生を選ぶと45名(44.1%)と4名(80.0%)ということになる。このように次々③、④、⑤の条件で選択すると最期は、全学生では13名(12.7%)になり、ドロップアウト群は依然4名が当てはまりこれら性格特性の条件をすべて含んでいたことになる。辻岡⁸⁾によるとAgは「気が短い、正しいと思うことは人にかまわず実行する、人の意見を聞きたがらない等の攻撃的な性質」とされ、情緒安定性との関わりで社会的活動にも、社会的不適応行動にもなる性格特性であり、八木⁹⁾は心理エネルギーの因子であり、生活態度を決定する重要な因子として位置づけているが、筆者らも同感である。Agというエネルギーを外界に適応させるかは、Oの客観的な見方や判断であり、また、気分の変化が大きいとより主観的に成らざるを得ないなど適応—不適応行動の両面に関わっている。従ってこのように特定の尺度で分類していく方法は性格プロフィールは尺度の全体の関わりからみるものであるためいささか問題もあるが、よりドロップアウトの学生性格の一部として今後検討して行きたい。

一方、D類についてはドロップアウト群の情緒安定因子に少しのばらつきがある程度で両群とも典型的なD型である(図4)。しかし、各尺度についてはC、Co、Ag、S(社会的外向)においてドロップアウト群が有意に高い結果が得られた。従って同じようにD類ではあるが、その中でも気分の変化がさほど安定しているとはいいい難く、人との協調性もよいほうであるとも言えない程度でやや自分勝手な攻撃的な面をもち、自己顕示的なところも少し強い傾向がドロップアウト群にあるように思われる。また活動的だがあまりにも簡単に行動に移しがちな傾向も窺える。

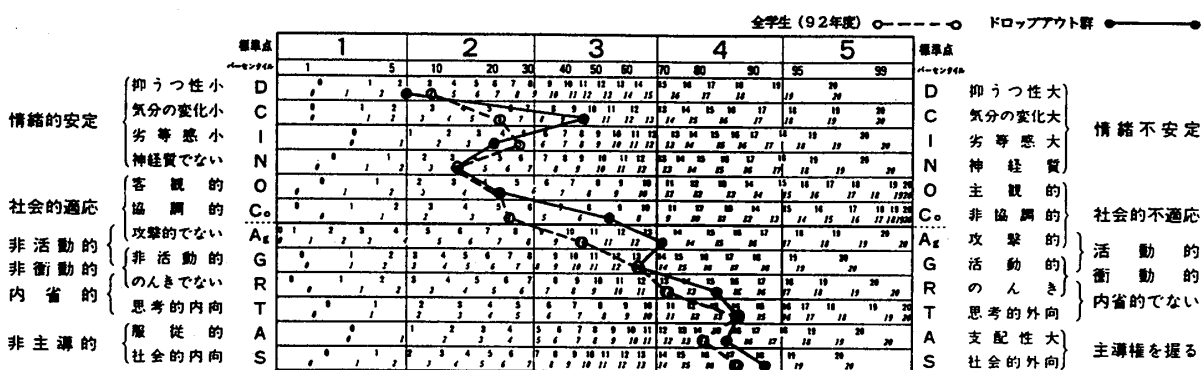


図4. YG因子の比較(D類)

(2) CMI 健康調査表

表3はCMIの領域別比較である。ドロップアウトの学生はⅠ型8名(53.5%)、Ⅱ型6名(40.0%)、Ⅲ型1名(6.7%)で、Ⅱ領域の学生が多いものの全体的には有意差はみられなかった。そこ

表3. CMIの領域別

	全学生 (92年度)	ドロップアウト群
Ⅰ領域	925 (78.3%)	8 (53.3%)
Ⅱ領域	208 (17.6%)	6 (40.0%)
Ⅲ領域	43 (3.6%)	1 (6.7%)
Ⅳ領域	6 (0.5%)	0
計	1182 (100.0%)	15 (100.0%)

$$\chi^2=5.78438 \quad N. S.$$

で両群の下位項目をみると(図5)、全体的に身体的・精神的自覚症状の訴えがドロップアウト群に多く、特に「消化器系」($t=2.17$, $p<.05$)「怒り」($t=2.68$, $p<.01$)の2項目と精神項目得点のすべての合計である「M-R」($t=2.19$, $p<.05$)においては有意にドロップアウト群に多く出現した。消化器系はストレスにより影響されやすく、特に食物とのつながりから甘えや依存欲求との関係が考えられる。怒りが高いことを考え合わせるとこういった依存的な欲求とその不充足感を抱いているのではと思われる。また、精神的項目が高いことは身体的な自覚症状そのものは全体的に神経症領域でないにしろかなり精神的にはその傾向が強いのかも知れない。

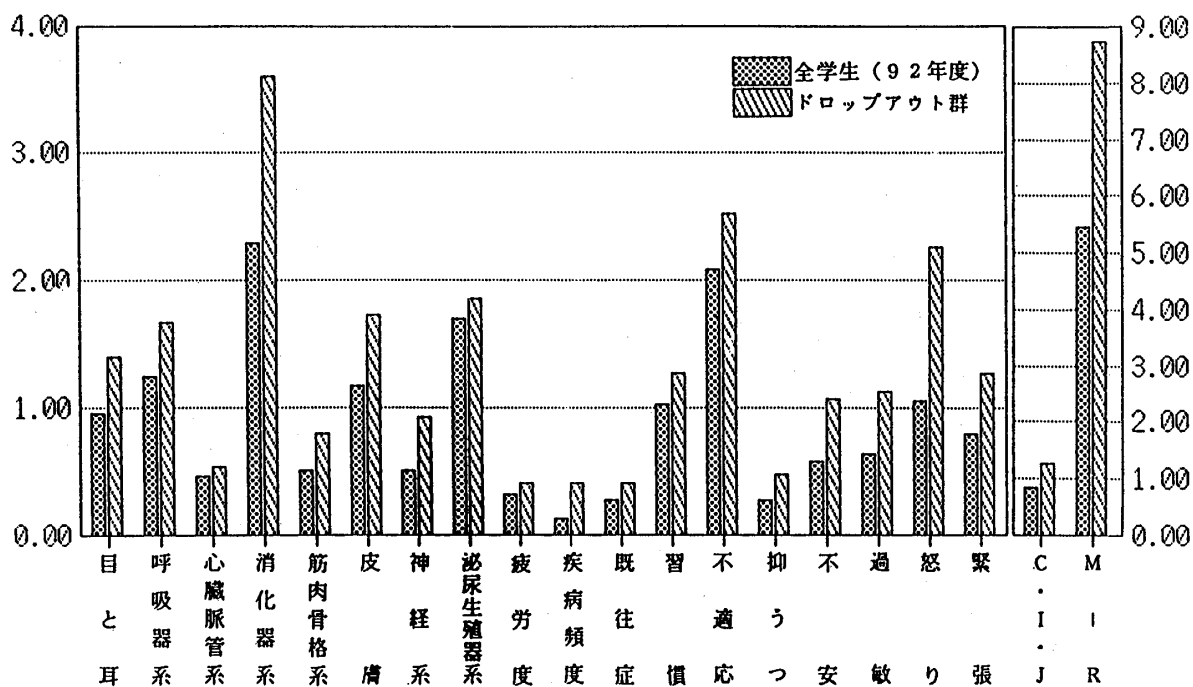


図5. CMIの下位項目の比較

(3) UPI について

表4はUPIの出現率の比較であるが、有意差のみられたのは52「繰り返したしかめないと苦しい」の1項目のみ($\chi^2=4.08744$, $P<.05$)であった。青年期の強迫心性については、この時期、社会的にも精神的にも身体的にも性的にも変化の激しい時期であり、こういった欲求に対する葛藤とその統制の意味で強迫傾向も強くなり勝ちである。不登校にかかわる強迫傾向¹⁰⁾もあり、この3名はそういった強迫傾向が幾分ドロップアウトに作用しているかも知れない。ちなみにドロップアウト群で最も多かったのは、18「くびすじや肩がこる」が7名(46.7%)、35「気分が明るい」5名(33.3%)、そして次に5「いつも身体の調子がよい」、20「いつも活動的である」、22「気疲れする」が4名(26.7%)と続いている。これは全学生群に最も多い、18「くびすじや肩がこる」が(34.9%)、次に「いつも身体の調子がいい」が315名の(26.6%)、35「気分が明るい」が253名(21.4%)と続き、出現頻度の順位はほぼ同様な傾向を示していた。

(4) 各検査間の関連について

全学生群とドロップアウト群のYGの性格類型とCMIの領域別との差においては、全学生群が、C類、D類にⅠ領域が多いのに比べ、B類、E類はⅡ領域の占める割合が大きい($\chi^2=278.841$, $P<.01$)。これに対してドロップアウト群はB類にⅡ領域の学生が多いものの有意差はみられなかった。B類およびD類とCMIの下位項目については、B類に関しては全項目に全学生群との差はみられなかったが、D類においては、「疲労度」($t=7.42$, $P<.001$)、「泌尿生殖器系」($t=2.11$, $P<.05$)に全学生群に、「目と耳」($t=2.19$, $P<.05$)、「怒り」($t=2.12$, $P<.05$)の項目にD類の訴えが多くみられた。しかし、この意味については現在理解する資料をもたないため今後に検討したい。

以上3種類のスクリーニングテストからドロップアウト群の傾向をまとめてみると、全体的には情緒不安定で行動化しやすい傾向をもつ学生の割合が多いが、YG検査でみる限りは他のB類の学生と性格傾向は似かよっていた。そして典型B型により近い学生のみで比較するとB型の中ではB型の情緒不安定で積極的な性格傾向の上に、あまり人への信頼感をもつことが出来ず、そういった希薄な対人関係の故に、逆にあまり劣等感をも抱かず、従って主観的に判断し行動する性格特性が窺える。また、ドロップアウト群のD類の学生においては、情緒安定といわれる中ではより気分の変動がみられ、協調的でもなく、幾分独断的に行動する面が窺える。従って、ともに不満をもち人と協調するよりも自己主張とか自分の考えを優先した行動をとりがちであり、この2種類の違いは、B類はD類に比べて主観的判断や見方が強いところであろう。さらにCMIの結果とも考え合わせると具体的にはB類とD類のそれぞれの特徴の上に、心理的エネルギーは十分もっているようであるが、うまく昇華しきれず、その不安定さを人やアルバイトといった状況に依存した形で満たそうとしているといえる。

表4. U P I の 比 較

番号	項 目	全学生 (92年度)		ドロップアウト群		有意水準
		人数(N=1183)	%	人数(N=15)	%	
1	食欲がない	54	4.6%	1	6.7%	
2	はきけ、胸やけ、腹痛がある	110	9.3%	1	6.7%	
3	理由もないのに便秘や下痢をしやすい	177	15.0%	1	6.7%	
4	動悸や脈が気になる	12	1.0%	0	0.0%	
5	いつも体の調子がよい	315	26.6%	4	26.7%	
6	不平や不満が多い	66	5.6%	2	13.3%	
7	親が期待しすぎる	20	1.7%	0	0.0%	
8	自分の過去や家庭は不幸である	10	0.8%	0	0.0%	
9	将来のことを心配しすぎる	50	4.2%	0	0.0%	
10	人に会いたくない	11	0.9%	1	6.7%	
11	自分が自分でない感じがする	28	2.4%	0	0.0%	
12	やる気が出て来ない	98	8.3%	1	6.7%	
13	悲観的になる	77	6.5%	3	20.0%	
14	考えがまとまらない	82	6.9%	3	20.0%	
15	気分が波がありすぎる	131	11.1%	4	26.7%	
16	不眠がちである	43	3.6%	0	0.0%	
17	頭痛もちである	61	5.2%	2	13.3%	
18	くびすじや肩がこる	413	34.9%	7	46.7%	
19	胸が痛んだり、しめつけられる	26	2.2%	0	0.0%	
20	いつも活動的である	203	17.2%	4	26.7%	
21	気が小さすぎる	66	5.6%	0	0.0%	
22	気疲れする	145	12.3%	4	26.7%	
23	いらいらしやすい	149	12.6%	1	6.7%	
24	おこりっぽい	83	7.0%	1	6.7%	
25	死にたくなる	11	0.9%	0	0.0%	
26	何事も生き生きと感じられない	13	1.1%	0	0.0%	
27	記憶力が低下している	63	5.3%	1	6.7%	
28	根気が続かない	132	11.2%	2	13.3%	
29	決断力がない	212	17.9%	1	6.7%	
30	人に頼りすぎる	133	11.2%	2	13.3%	
31	赤面して困る	148	12.5%	1	6.7%	
32	どもったり、声がふるえる	37	3.1%	0	0.0%	
33	体がほてったり、冷えたりする	51	4.3%	2	13.3%	
34	排尿や性器のことが気になる	8	0.7%	0	0.0%	
35	気分が明るい	253	21.4%	5	33.3%	
36	なんとなく不安である	101	8.5%	1	6.7%	
37	独りでいると落ちつかない	37	3.1%	0	0.0%	
38	ものごとに自信をもてない	114	9.6%	1	6.7%	
39	何事もためらいがちである	77	6.5%	1	6.7%	
40	他人にわくとりやすい	24	2.0%	0	0.0%	
41	他人が信じられない	25	2.1%	0	0.0%	
42	気をまわしすぎる	123	10.4%	1	6.7%	
43	つきあいが嫌いである	21	1.8%	0	0.0%	
44	ひけ目を感じる	40	3.4%	0	0.0%	
45	とりこし苦労をする	90	7.6%	1	6.7%	
46	体がだるい	68	5.7%	1	6.7%	
47	気になると冷汗が出やすい	15	1.3%	1	6.7%	
48	めまいや、立ちくらみがする	131	11.1%	3	20.0%	
49	気を失ったり、ひきつけたりする	5	0.4%	0	0.0%	
50	よく他人に好かれる	112	9.5%	1	6.7%	
51	こだわりすぎる	80	6.8%	3	20.0%	
52	くり返したしかめないと苦しい	59	5.0%	3	20.0%	P < .05
53	汚れが気になって困る	17	1.4%	0	0.0%	
54	つまらぬ考えがとれない	62	5.2%	1	6.7%	
55	自分の体はへんな匂いがすると思う	8	0.7%	0	0.0%	
56	他人に陰口をいわれる	9	0.8%	0	0.0%	
57	周囲の人が気になって困る	57	4.8%	2	13.3%	
58	他人の視線が気になる	145	12.3%	2	13.3%	
59	他人に相手にされない	7	0.6%	0	0.0%	
60	気持が傷つけられやすい	96	8.1%	2	13.3%	

4. 援助に向けて

本学では学生は各クラス単位制をとっており、アドバイザーと称する担当教員が個別的な相談にのるシステムになっている。従ってドロップアウト群の15名もアドバイザーと相談（その頻度や内容は異なるが）退学する経過がとられている。しかし、アドバイザーの元へ、あるいは相談室へ話ができる頃はすでに学生の中で退学することが決まっているようであり、また、客観的にも欠席が多く単位取得が難しい状況である。今回のドロップアウトの学生で、相談室に関わったのは5名であり、その内1名は退学の相談ではなく他の理由で来室したものである。その他の学生はアドバイザー自身が相談担当者であったという学生3名、そしてアドバイザーと学生相談室との相談の上、学生相談室が担当した1名である。

学生の面接から感じたことは、上述したように気持ちの中では退学を迷う時期が既に過ぎていることや、数カ月にもわたって授業に全くでていないため、大学への未練はあるもののもう登校するためのエネルギーはもちにくく、再登校という行動を起こすには非常に困難な状態になっている。さらに恋愛問題やアルバイトでのより肯定的な自己評価などが今の生活の大切な部分を占めていることも一因となる場合もある。そしてまた、面接中に学生が語る中で、授業の少しのつまずきや、あるいは欠席が続くなど些細なことで「もうだめだ」と自分で悲観的にではなく、先に思ってしまったといった一種の真面目さも窺えた。大学生活はもちろん自主性と自己管理することがもとめられるわけであるが、そのあまりに情報のないままにあっけなくもうだめだ判断して「あきらめる」といった手段をとる傾向が安易でもあり残念でもある。その制断の前に相談の機会があればと思われる。本学では入学後1カ月ほどして出席状態の調査があるが、この時点ではまだ明確にはわからないが、ある程度の子測のもとに、アドバイザーと相談を密にしながら、学生へのアドバイザーからの具体的な情報提供をすることによって、特にB類の学生には客観的、実際的な見方や判断ができるような情報提供を、また、D類の学生には具体的な適応行動をとることができるような情報を提供しつつ、共に不信感を補うような、また依存性を充足できるような対人関係をつくることが必要と思われる。

5. スクリーニングの方法について

面接群のスクリーニングはまず、UPIの60項目のうち、抑うつ的、神経症的な項目である10項目に1項目でも反応している学生を選択し、次にYG性格検査のB類、E類、CMI健康調査表のⅢ領域、Ⅳ領域にはいる学生をその対象とした。さらにより慎重を期してUPIの項目に15項目以上を反応がみられる場合に面接群とした。この基準により昨年面接群が115名となった。このうち、UPIの項目の25「死にたくなる」あるいはCMIの特定精神的項目チェックの内、易

怒性を除いた、憂うつ、希望がない、自殺傾向、神経症の既往、精神病院入院既往、強迫観念、理由のないおびえのどれかに記入がある場合、CMIのⅣ領域、そしてⅢ領域とYG性格検査のB類またはE類が重なっている場合という条件により、58名を対象に入学後の生活や気持ちについて直接面接したが、結果は大半は入学前の不安や不充足感を乗り越え大学生活に適応していた。

今回のドロップアウト群の学生は15名の内、4名は115名の中に入っており直接面接する対象にもなっていたが、面接する時期が10月と遅いこともあり1名を除いて来室しなかった。

いずれにしても従来のスクリーニングの方法ではドロップアウトの学生は捉えきれず、新たな指標が必要となる。その一つの試みとして、今回の結果から典型B型、準型B型において、Ag(攻撃性)、O(主観性)、C(回帰性傾向)、A(支配性)が標準点の4～5区域にあり、I(劣等感)が1～3区域の学生は一応ドロップアウトの可能性も考えられると捉え、支援の構えをもっておく必要があろう。

7. ま と め

以上、ドロップアウトした学生とその他の学生のYG性格検査、CMI健康調査表、UPIの検査結果を比較検討する中で、ドロップアウト群にはB類とD類といった共に行動面での積極的傾向をもった学生に二分されていた。その中の特に、心理的エネルギーの部分(Ag)が強く関与しており、協調性(Co)、主観性(O)との関わりによってドロップアウトの可能性が左右されることが示唆された。今後このAgを中心に他の尺度がどのように関われば、ドロップアウトや神経症的傾向、その他情緒面、行動面にいかに表れるかをさらに考察したい。

(本論文は第30回全国大学保健管理研究集会における発表に加筆したものである。なお、本研究にあたり岡田および番匠が夙川学院短期大学特別助成金を受けたことに感謝の意を表すと共にその研究の一部を報告させて戴く。)

文 献

- 1) Bloss, P. : On Adolescence 1962 青年期の精神医学(野沢栄司訳) 1971
- 2) 石井完一郎: 大学大衆化時代におけるスチューデントアパシーについて 現代のエスプリ 168 至文堂 1981
- 3) 細木 照敏: 留年学生について 青年の精神病理(笠原嘉他編) 弘文堂 1976
- 4) 宮沢 秀次: 留年 青年心理学ハンドブック(西平直喜他編) 福村出版 1988
- 5) 岡田督、番匠明美、益田三三子: 女子短期大学生の心理特性(I) 夙川学院短期大学紀要16 1992 1-13
- 6) 岨中 達: 教養課過程留年と卒業遅延 京都大学学生懇話室紀要1 1971 42-53
- 7) 岨中 達: 留年 キャンパスの症状群(笠原嘉他編) 弘文堂 1981
- 8) 辻岡 美延: YG性格検査実施手引 日本・心理テスト研究所 1987
- 9) 八木 俊夫: YG性格検査 日本心理技術研究所 1987
- 10) 山田 和夫: 現代青少年の病理 こころの健康 vol 5(1) 1990 金剛出版